



## 総 題 「ローマの信徒への手紙」における 贖い

### 第 5 課

ぎにん りっぼう  
義認と律法

アドベンチスト聴覚しょうがい者友の会教材部  
山地 宏 2010, 7, 24~2010, 7, 31

#### 1. はじめに 7月24日（土曜日）

「ところが今や、律法とは関係なく、しかも律法と預言者によって立証されて、神の義が示されました。すなわち、イエス・キリストを信じることにより、信じる者すべてに与えられる神の義です。そこには何の差別もありません。」（ローマ3：21, 22）この言葉は、あるユダヤ人たちにとって2つの点で心配の種になることを含んでいたと思われます。

一つは、律法なんて守らなくてもいい、律法なんてどうでもいいものだ、自由に好きにやればいい、信仰さえあればそれでいいのだから・・・という律法を軽く見るようになってしまっているのではないか、という心配です。

もう一つは、神様はユダヤ人を特別な民として選ばれたはずなのに、神様は人種によって差別をしない、ユダヤ人も異邦人も同じだというのは矛盾しているんじゃないか、・・・という風にユダヤ人を軽く見るようになってしまっているのではないか、という心配です。

この2つの心配を理由に、信仰による義に反対する人たちに対して、大丈夫だよということを説明する方法として、パウロはアブラハムのことを例に取り上げています。今週はアブラハムを取り上げながら、義認と律法について考えます。

#### 2. 確立された律法 7月25日（日曜日）

「それでは、わたしたちは信仰によって、律法を無にするのか。決してそうではない。むしろ、律法を確立するのです」（ローマ3：31）とパウロは言っています。これは、簡単に言えば、私たちが義とされるのは信仰によるのであって、私たちは義とされるために律法を守るのではないということです。義とされるためには信仰が必要なんです。アブラハムが義とされたのは、神様を信じたからです。

#### 3. 恵みか負債か 7月26日（月曜日）

アブラハムが神様から義とされたのは、何によってかということについて、ローマ4：3では創世記15：6を引用しています。アブラハムは神様を信じたのでそれによって彼は義と認められました。創世記15：6でアブラハムが義と認められたときには、アブラハムはまだ割礼も受けていませんでした。アブラハムが割礼を受けたのは99歳のときです。創世記17章10節のところで初めて割礼のことが出てきます。つまり、アブラハムはまだ割礼を受ける前に義と認められた、ということになります。割礼を受けることは、ユダヤ人であることの結果でしたから、ユダヤ人であることと、義と認められることは関係がないことになります。つまり義と認められることは、律法を守ることのごほうびでもなく、また、ユダヤ人であることの結果でもないということです。義と認められるのは、ただ、神様からの一方的なお恵みによるということが、アブラハムの例からわかるのです。

#### 4. 約束と律法 7月27日（火曜日）

ローマ4章の中にもう一つ創世記から引用している聖句があります。17節の「『わたしはあなたを立てて多くの国民の父とした』と書いてあるとおりである」（口語訳）という部分です。これは創世記17章5節からの引用です。ここに書かれている多くの「国民」と訳されているギリシャ語は、「異邦人」とも訳せるそうです。つまり、アブラハムはここで神様から、あなたは多くの「異邦人」の父とした、と言っておられるのです。つまり、アブラハムが信仰の父であり、義とされた人のモデルと見るならば、彼は異邦人で義とされた人のモデルでもあるのです。さらに、律法との関係で言うならば、アブラハムの時代には、まだモーセに与えられたような儀式や律法は与えられていませんでした。つまり律法を守ったから、アブラハムにこの約束が与えられたわけではなかったということなのです。

#### 5. 律法と信仰 7月28日（水曜日）

律法と義の2つが関係あるものとして語られるとき、よくある間違いは、律法を守ることで義とされるというふうに考えることです。律法は神様の御品性をあらわしています。そして、義もまた神様の御品性のことだといえると思います。そういう意味では律法と義は関係があるとも言うことができると思います。しかし、その2つの関係は律法を守ることで義とされるというようなものではありません。

人間はもともと神様のかたちにかたどって造られました。つまり、神様のお姿を見て、そのお姿を真似ることができる存在として造られたわけです。そして、罪を犯すまでは、人間は神様の姿を真似ることを喜びとしていました。ところが罪が入り込んで、神様の姿を見えなくしてしまいました。別の言い方をすれば、罪が入り込んで以来、人間は「愛」という神様の本当の御品性がわからなくなってしまったということです。つまり、罪の根本的な問題は「愛」という神様の本当の御品性を見えなくしてしまったということにあるのです。しかし、イエス様が人間として来てくださいました。イエス様のお姿を見ることによって、人間は神様の本当の姿である愛の御品性を知ることができるようになりました。神の愛から離れたために、死ぬべき存在となってしまった私たちの身代わりとして、イエス様が十字架で死んでくださいました。そのようなイエス様の姿が、神様の本当の愛のお姿だと信じる人は、その信仰によって神様の本当のお姿を見るのです。律法も神様の愛の御品性をあらわすものですが、イエス様的人格に触れたときに、人の心を内側から変えて、喜んでその律法の要求に従って生きるようにさせてくれるのです。単純に言うと、信仰によって義とされた人は、律法に喜んで従うようになるということです。

#### 6. 律法と罪 7月29日（木曜日）

律法は神様の御品性をあらわしています。神様から離れてしまった人間が律法を見ると、自分とかけ離れたお方を示しているのので、自分が罪人だということを知らされます。でも、神様の御品性が変わらないように、律法の**本質**は変えることができません。律法が廃止されたとか必要なくなったと言うならば、神様の愛の御品性も廃止されたり必要なくなったということになります。イエス様が十字架にかかる前でも後でも、神様の愛は変わりませんでした。ですから、律法も今でも依然と同じように変わらず必要なものなのです。